

第2巻 第5章 「清川 御所王子 社」

同小屋の西南方向約100先に小高い丘（小山／標高約1,380m）がある、そこに図(表)－1のとおり
の奇妙な神社（寸詰まり鳥居と石祠）がある。



石祠の外寸 横 43cm×高さ 48cm×奥行 42cm
屋根部外寸 裾幅 58cm×高さ 43cm×奥行 57cm



上部笠木幅 100cm、下部鳥木 89cm
鳥居地上高約 55cm、脚直径約 16cm



○石祠四面と鳥居脚には何も刻字なし
○向きは西北西



この丘から同小屋を望む

図(表)－1

2023(R5)年7月31日（月）に阿部剛士と共に初めて当地に入った時に気付いたものである、その時は繁茂した灌木（雑木）が取り囲み頭部が見える程度であった。この時は道具もなくそのままにしたが、その後、改めて同年8月29日(火)～30日(水)、宮林良幸・阿部剛士・大沼香は周囲の雑木を刈払いすると共に細部調査に入った。少しずつ様子が明るみになるに連れてわくわく感が疼いた、そして、この全容の異様な造りに3人は驚愕した。次の関心は最大の問題はこのものの建立経緯（趣意、由緒）であるが、この鳥居と石祠には何も刻字は無く一端諦めることにした。なお、同小屋から同神社までの道型はしっかりしていたものの、道の両側から笹竹・雑木が被さり、非常に歩き難い状態にあったことから支障木を刈払い除去した。

そこで、一旦小屋の前に移動し、入り口正面の石塔（石碑）の調査に入り、まずは図(表)－2中向かって左側から調査した。その刻字内容は「第3章 清川行人小屋前石碑群」に別記した。

続いて、同図2 a右側の石碑に取り掛かった。石正面に乾燥した苔類が付着し一見何も刻されていないように見えたが、予め持参した金ブラシとタワシで丁寧に除去する中で、何と図(表)－2bのとおり刻字碑文が表れ、ついに、前記鳥居と石祠の建立趣意碑文を刻したものであることを突き止め、以下のとおりに解読するに至った。つまり、誰が、何時、何の目的なのかという建立趣意が判明したのだ、しかし、前出三つの書籍や既販書籍等には何も触れられていない、まったく記述がない。



図(表)－2 a



左 面

干時 嘉永五年(1852) 壬子歳八月□□



正 面

湯殿山 清川御所王子社
正一位 稻荷大明神籠堂
建立 発願主 荒木源兵衛 拜碑

大さ 横約38cm×縦約79cm×奥行約34cm

図(表)－2 b

- (1) 余りの異様さに次の6点の問題意識を持ちながら調査を行いつつ考察を試みた。
- ①同社石祠四面と鳥居脚には何も刻字ないことから、その建立趣意の意味すること
 - ②同社に向かう(拝礼する)と西北西を向くこと

- ③石祠に^く彫り貫き彫刻している「日と月」は基本形と配置が反対になっていること
- ④鳥居の高さは寸詰まりの様相であること
- ⑤同社の名前が三通りあること
- ⑥鳥居前に墓石があること
- ⑦お札と義川版画（文政三・1820年作成）に描かれていること

①建立趣意の意味することについて

小屋前に直面する2基の石碑の中で右側のものが、建立趣意を刻したものであることが分った。前記図(表)－2bのとおり、**嘉永五年に荒木源兵衛が発願主（企画・立案、所要資金投資役、施主も兼務か？）**となつて稲荷大明神の籠堂^{こもりどう}（石祠・鳥居）を寄進・奉獻・建立した、その経緯をこの碑に刻み、謹んで敬意を以って拝み奉るものである、と理解出来る。ただ、出身地が刻されていないように見えたが、後日判明した。

ここで荒木源兵衛とは何者なのか、である。布施範行の直感は永松銅山を発見した荒木源内の子孫（親戚筋）ではないかということ、そして西川町史を私に紹介された、私もそう言われれば同感である。そこで、2023(R5)年10月3日(火)西川町郷土史調査員の清野幸夫を訪ねてさらなる教示を賜ったことからそのことを含めて整理すると次のとおり。西川町史資料編第27号（間沢村文書）2頁に記述の内容を図(表)－3に抜粋する。

✓1：永松鉦山発見者**荒木源兵衛は荒木源内の分家**である。両者は西川町旧間沢村小倉に居住（住家は隣同士）していた。荒木源兵衛家から旧日月寺の住職に入っている名家であった。

✓2：当該小屋の所は、山師（鉦山師）から熱い注目を集めた鉦山開発の烏川流域内にあった。

✓3：標高約1,310mの高地にこのような大それた物、すなわち石祠と鳥居を建立するからには、運搬等にも多額の費用を要し相応の資産家であった。

✓4：大友義助著「永松物語」によれば、「・・・同銅山は江戸時代初期の慶長十六年（1611年）西川町間沢村の住人荒木源内が発見したとされている。その本拠（本社・本部）には「神明社・山神社・稲荷社」を祀った。五月八日、九月八日（毎月八日は湯殿山の縁日とされた）は直々に**湯殿山**に登拝し、お山繁昌、出鉦成就、諸役人安全の祈祷・・・」とある。

ここで注目するのは本拠（本部）に祀った三つの神様である。それぞれは、伊勢神宮（内宮）の天照大神、山の神、穀物神の**稲荷神**を祭神とする。ここで浮かぶが、高清水通り調査報告書ダイジェスト版に記述した「山師（鉦山師）が尊崇の神仏世界」と一致して来る。また、同碑最初の刻字に「**湯殿山**（清川御所王子社）」を冠している、これを素直に読み取れば、**湯殿山を拝むために、あるいは、湯殿山崇敬を形にするために建立したものと理解出来る。**

すると、図(表)－2bに刻字の「稲荷大明神」と「稲荷社」は共通、「湯殿山」と「湯殿山」でぴったり重なる。これらからは荒木源内の末裔（源内家系統）であろうとの推理は合理的な意味を持つことになる。それだけ著名な人であったからいちいち居住地（出身地）を石碑に刻しなかったのだろうか。

✓5：図－4aは、その昔、烏川不動滝（不動尊）の専属別当を担っていた岩根沢古澤（古澤栄次郎）家に伝わる史料であるが、同社の「社守」を担っていた。また、古澤栄次郎家は図－4bのとおり、「清川小屋坊」とも称し、今に続く清川行人小屋の管理人であった。

小役人荒木源内は、地元小倉の出身で、先祖は慶長十六（1611）年、永松鉦山を発見している。石碑（この物では無い）の揮毫者である日月寺住職廣道は、**源内の一族荒木源兵衛家**出身である。

図(表)－3

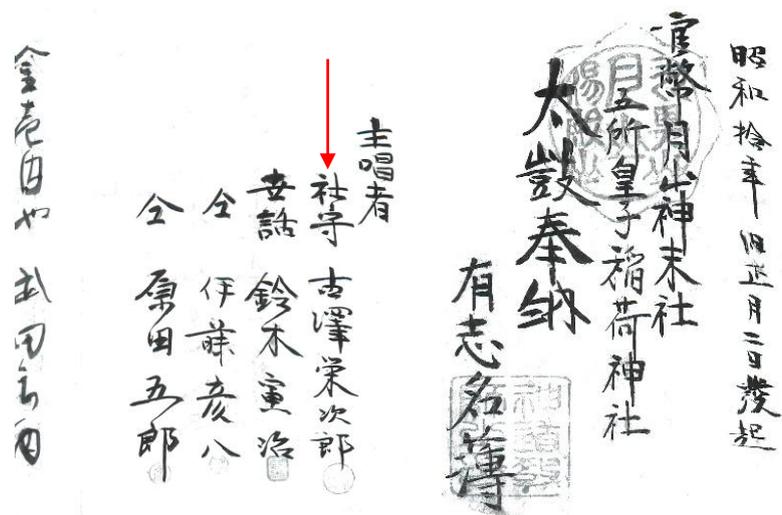


図-4a

②向きについて

鳥居に向かい現地でコンパスを当てると西北西を指し、俯瞰すると図-5とおりで、その先に湯殿山が位置する。角度に少しの差異はあったとしても、図(表)-2b、あえて**同碑頭部に「湯殿山」を刻している**ことを合わせ、「湯殿山」を遥拝しつつ、五穀豊穰・子孫繁栄を祈った祭儀の場でもあったものと推察出来る。

③「日・月」彫刻の配置について

まずは基本形を押さえておく必要があり、他にもあるがここでは四つを取り上げる。

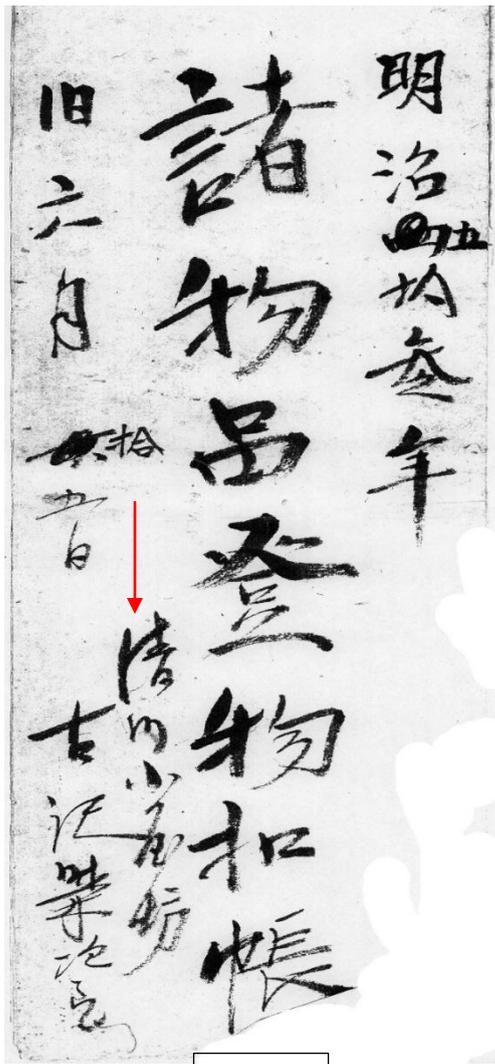


図-4b

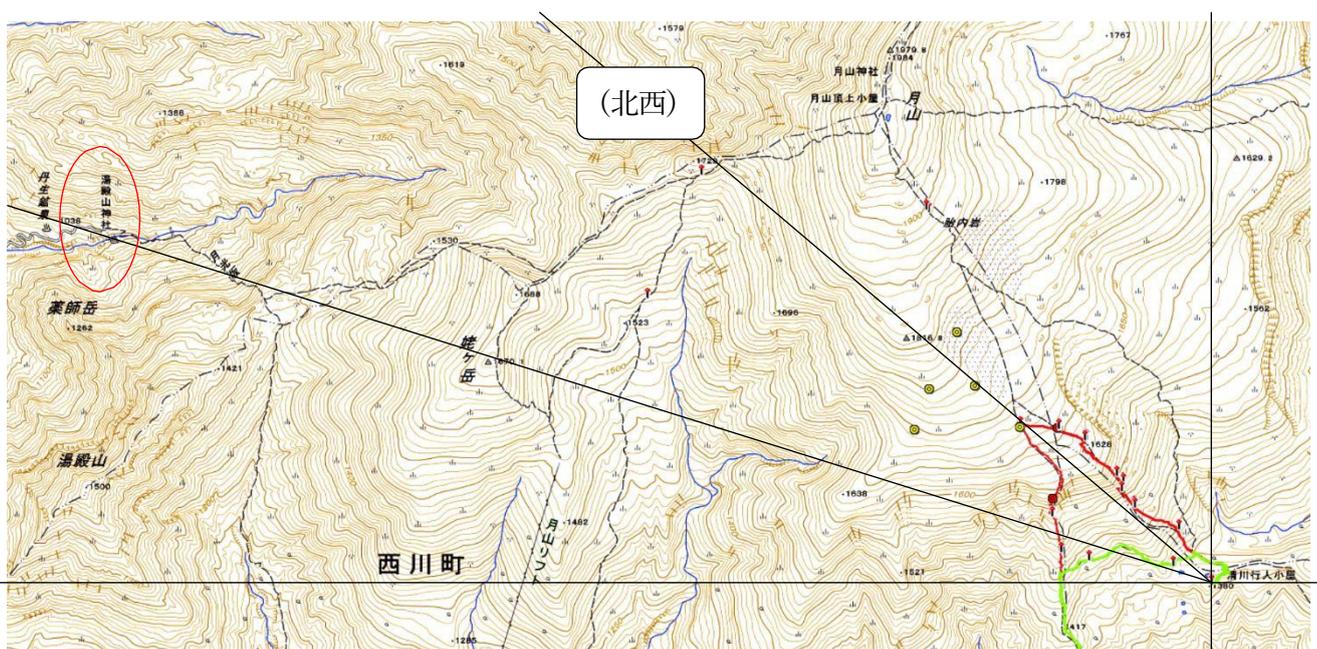
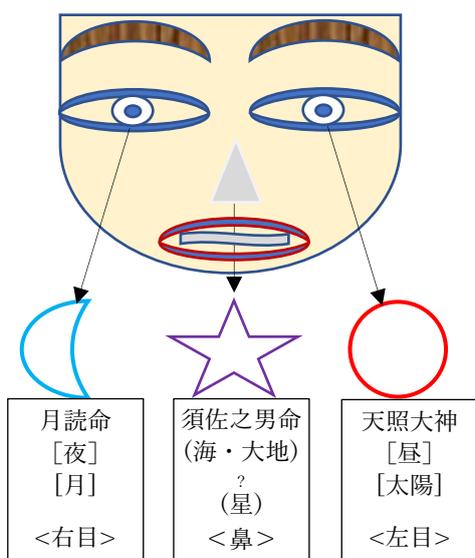


図-5

一つ目は図(表)－6 a、日本神話（記紀）において、天照大神と月読命に須佐之男命を加えた三貴子の登場を華々しく物語っている、伊邪那岐命（イザナキ）が黄泉の国からこの世に帰って来て禊（水浴）をした時に最後に生まれ落ちた三柱の神々のことである、ここでの肝は皇祖神である天照大神（日）は左目から生まれ、月読命（月）は右目から生まれたということ、天照大神は昼と大地を統べ、月読命は夜と海原を統べよとなっている。

二つ目は図(表)－6 b、江戸時代までの天皇の礼服のこと、着用する天皇は北極星の身（太極の立場）で、ここでの肝は、正面は頭に近い方に宇宙の両眼なる左肩に「日（三本足鳥）」と右肩に「月（蟾蜍と兎）」を、背面は頭に近い方に北斗七星を背負う形となっている。なお、北極星（北辰）信仰とも密接に関連していることは言うまでもない。



図(表)－6 a



図(表)－6 b

いずれも、これらに共通するのは、本尊・本体から見て左側に日（太陽）・陽を、右側に月（太陰）・陰を配置しており、中国古代神話を初源としているものの、我が国では記紀が元になっていることは言うまでもない、「これらから左上右下の思想」が生まれたものである。

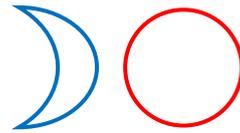
そこで、本題に戻って、ここの石祠の『日・月』剝り貫き彫刻は、図(表)－7のとおり日月の配置（位置関係）がこの基本形と反対になっていることが分る。荒木源兵衛はこのことが分りつつ敢えて反対にした理由は、ここの地理に鑑みて、ここで佇んだ時、左手には湯殿山、相対的に右手には月山があることを認知・分別していることから、合掌・柏手の拝礼に当って自然な向きで両山を遥拝出来るように左側に日（湯殿山の象徴）を、右側に月（月山の象徴）を彫刻した、遠くの湯殿山・月山の地理的相対位置と手元・目の前のシンボル配置を合わせたのだろう。このように明確な意図・企図を以って彫刻したということだと推察出来る。

湯殿山は月山の両者に対する崇敬の姿勢を表現したものであろうが、前記、石碑頭部に「湯殿山」を刻していることと、ならびに、額づいた向きが湯殿山の方角からしては、湯殿山を格別の重要視対象にしたというよりも、最終目的地としての湯殿山ということではなかったのか。

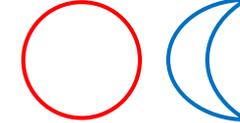


図(表) - 7 a

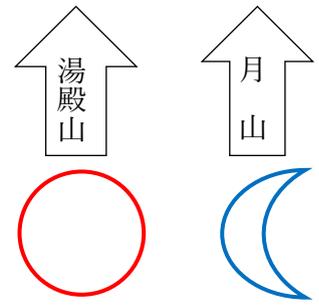
(基本型)



現地現物



図(表) - 7 b



現物の配置は基本型と反対

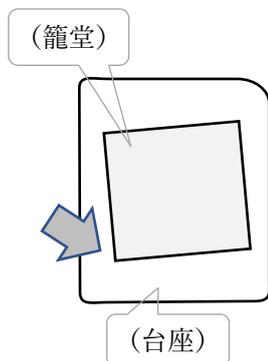
図(表) - 7 c

ここで、勘違いし易く留意すべき点に触れる、「^{さじょううげ}左上右下思想」に基づくよりも、月山の方が標高は高い、よって上位ではないか、月山を上位と見たのだろう、という問題意識もあろうが、それはたまたま『位の高い左』と標高のより高い月山が一致したということである。

④寸詰りについて

石祠（籠堂）の向きと、鳥居の寸詰まり様相のことである、台座に対して籠堂（石祠）が図(表) - 8 a のように上から見て左回転しているが、融雪時の圧力が原因でねじれ回転したのだと考えられる。現地の鳥居は図 - 8 b のとおりであり、相応に埋まっているにしても、周囲の地形・土質からして、自然に埋まった、あるいは、例えば地上高2mほどのものを人工的に埋めたという状況にはない、**当初から豪雪対策を見据えて寸詰まりのような埋め方（設置）**をしたのだろう。結果して、当初から額づいて拝むように設置したのだろう。鳥居の分類は図(表) - 8 c のとおりの大きくは二つであるが、ここは明神鳥居相応である、額束と貫は省略し、笠木と鳥木を以って代表させた造りとなっている。

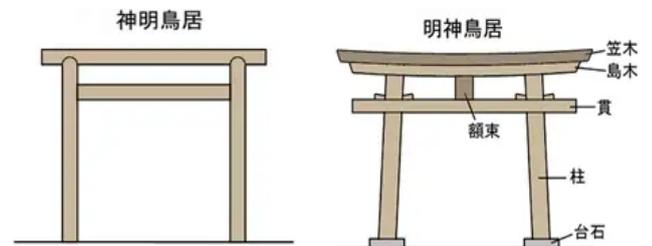
なお、石祠内部から江戸時代貨幣の寛永通宝5枚と鉄板性の紙垂（御幣）を確認している。



図(表) - 8 a



図(表) - 8 b



図(表) - 8 c

⑤名称について

その1；同小屋内の神棚には、図 - 9 のとおりのお札が祀られている。図(表) - 2 bにおいては「御所王子」であり、これは「五所皇子」、発音は共通して「ごしょのおうじ」であろうが、漢字は異なっている、違わしたことに何か特別な意味はあるのか？

そもそもの「五所の神」から調べて見る。ネットを調べると、一般的には次の神々を祭神とする、と云われるものの諸説があり——月読尊がないのは面白くないが！——地域・神社により入れ変わるようだ。

- あまてらすおおかみ
ア天照大神：天地を創造した神（主祭神）
- おおくにぬしのみこと
イ大國主命：日本を治めた神
- すさのおのみこと
ウ素戔嗚尊（須佐之男命）：豊穰や農業の神
- いざなぎのみこと
エ伊邪那岐命：太陽や男神の神
- いざなみのみこと
オ伊邪那美命：月や女神の神



図-9

『五』そもそもの由来にも諸説があり、一般的には、古代中国の五行説（天地万物の運行は木・火・土・金・水の五要素によるとする説）が有力であるという。

これらの五柱は日本神話（記紀）を原初とし、いわば**天皇制皇統胎動期の神々**であるからには、天皇住まいの御所は五所（五柱の神々の住処はすなわち天皇が住まう御所）であり、王様は日本では天皇——天皇の男子は皇子（すなわち王子）となってやがては天皇へ——であり、ある時代のある有力者の漢字の当て方による異同であって、纏めた（一つに合祀した、統合した）同じ神を指すことには何ら祖語はないと考える、なお、あらためて、名称について図(表)-10に整理する。

その2；あるいは、ここでの「五所」とは「奥羽・信越の五洲」を代表する意味を含まないであろうか？ 日本列島の東北地方と北陸地方にまたがる地域の呼称だそうである。鶴岡市羽黒町手向「(宗)三山大愛教会」から頂戴した三山修法の文を参考すると、出羽三山の霊徳は神代（往古）より奥羽・信越の五洲に降し、後に関東八州に及ぼしたとある。

(清川)御所王子社		五所皇子（稻荷神社）		五所王子
現地現物の石碑に 建立趣意刻字 湯殿山論争絵図	お 札	丸山茂著「岩根澤の面影」、および原田一男著「月山登山案内」の二つの書籍に記載		湯殿山道中絵 <small>ぼなし</small> 嘸
特に“五”には諸説あるが、天皇制皇統原初に繋がる天神地祇の代表格神々5柱を一括りで象徴した表現であり、企図した神の性格を踏まえれば「御所王子=五所皇子=五所王子」であり何ら問題は <small>N o n</small> ない。				

図(表)-10

その3；昔はどうだったのかを図-11のとおり古絵図に見る。図-11aは寛政4（1792）年頃のものと思われる。同11bも同じ年代のものと思われ、同じ施設を指すのに一方は「御所」、他方は「五所」である。石碑刻字の趣意によれば、今の石造社殿は嘉永五年(1852) 建立であり、寛政4（1792）年頃にはすでに存在していたことから、建替え更新であろう、いずれにしても相当歴史は古いものと思われる。こうなると、元々の最初の建立の経緯を知りたくなるが・・・。



図-11a

両造法論関連『湯殿山論争絵図』参照



図-11b

「湯殿山道中絵嚢」参照

その4；私は、2011(平成23)年、熊野古道（山道そのものが世界遺産）のほとんど全ルート²⁹を29連泊30日間でスルーハイクしているが、そのルート沿いに王子、王子社と名前の着いたスポットが沢山ある、上皇や貴族の熊野詣先達を担っていた修験者達が道中の守護を祈るために、地元民が在地の神を祀るために立てていた社を「王子」として認定し、神社として整備したと云われている。その数100個所以上と言われ「数多」を意味する九十九を付けて「^{くじゅうくおうじ}九十九王子」と称されている。「神社はすなわち王子」は「天皇・貴族」と相互に必要十分条件下にあり同値となる。

ところで、参考に、近くの山岳に祀られた五所（五社）のこ^と、2023(R5)年10月5日（木）NHKBS-3、19時30分から放映の「にっぽん百名山・飯豊連峰において、「飯豊山導者絵図」が紹介され、その中に飯豊山頂に祀られた飯豊神社「一王子・二王子・三王子・四王子・五(注連)王子」の記述が見えた。同社の五王子の総体として五王子社・五社・五社権現・飯豊権現などとも称したということである。

その5；山折哲雄著「仏教信仰の原点」（講談社学術文庫）を参考にすると、昔のことではあるが、天皇の祭儀新嘗祭に係る御一代（一生）一度の即位時の大嘗祭に触れ、真言（空海）のその密教儀礼と強く結び付いたことを解説している。その空間真言院は図-12のとおりで、五大明王が南面して並べられる、向かって右（東側）には胎藏界曼荼羅、左（西側）には金剛界曼荼羅を飾るとされている。そしてここにおける「御所」はまさに天皇お住いの空間であることから、御所は五所、五所は御所で表裏一体の意味を成すことから、**五大明王**を祀る、すなわち、真言密教祭儀の舞台と見立てたのではないのか。

以上を俯瞰し、神道と仏教の浸透度合いから、例えば、清川行人小屋周囲についてである。御所王子神社（鳥居と称する）と戒名刻字墓石（墓石と称する）との後先から追って見る。

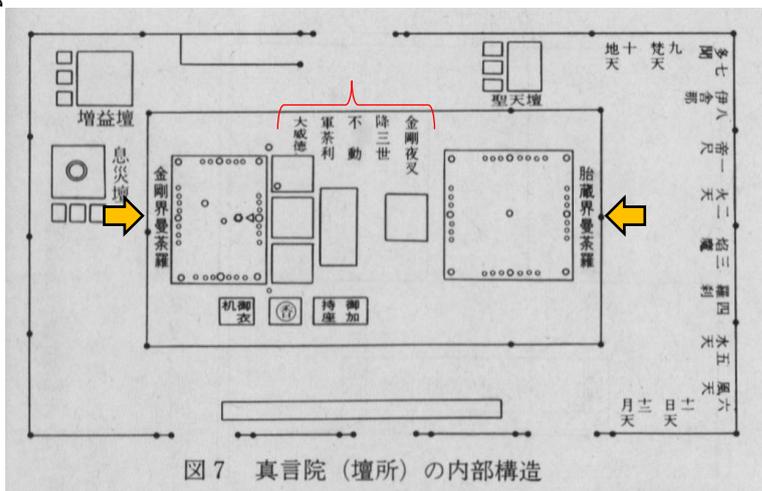


図-12

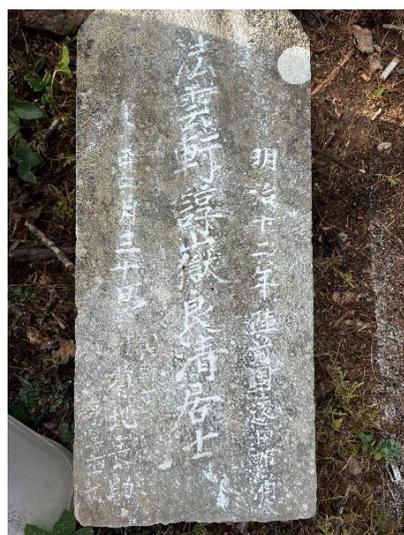
旧日月寺を開山し追って清川道を開削した直後に、アニミズム思想（理論的教義がない）に根差した神霊的空間を感じたことから五所の神を勧請して神社を先に建立した。その後、仏教（真言とか、天台とかの壮大な宇宙理論で説いた教義を持つ）意識が高まりつつある流れの中で、その社を護法善神と見立てるようになり、安心感が増し、周辺での死者の墓石を安置するようになった。

逆に仏教（真言とか、天台とか）が先行的に浸透し、周辺での死者の墓石を安置したが、本地垂迹思想——仏を上位の本地とし、この世に神となって示現する、神が権現（仮の姿）となってこの世に現われる。——の中で後から護法善神の必要性を感じ、五所の神を勧請して祭り建てた。

のいずれにせよ、崇仏敬神諸々の心を纏めて五柱の神様に託した、翻ってその神様のご加護・恩恵を齎す力は人間界においては現人神の天皇という信仰の世界（範疇）ではないだろうか。

⑥同社（鳥居）前墓石について

図(表)－13のとおりで、三分の一は地中に埋まっている状態であり、当初は神社の建立経緯を刻したものでないかと期待したが、そうではなく墓石であった。ここに幾度なく立ち入り格別に思い入れがあった神社だったので、遺族はそこを慮ってお骨（分骨か？）と共に墓石を安置したのである。西蔵は岩根沢に実在した山先達であり、施主は菊池氏にせよ、西蔵は代参的に建立を担ったのであろうか。



正面

法雲軒諱嶽良清後居士
 明治十二年陸前国遠田郡□谷
 □□四月三十日 菊池長助
 享年六十歳
 六軒丁



左面

岩根沢
 山先達
 西蔵

図(表)－13

⑦お札と義川版画に描かれていることについて

前出お札の下部には図－13aのとおり、御所王子社出入口結界の鳥居と両側に吹き流しのような物が見える、P点には石塔が見える、これらも2023(R5)年10月11日（水）に調査したが、痕跡を見付けることは出来兼ねている。また、義川の版画（文政三・1820年作成）には図－13bのとおり同神社と参道入り口に鳥居が表示されている。なお、13bは義川筆『湯殿山道中版画』より拝借したもので入手先不明となったが、武田喜八郎著作集巻二によれば原本は住吉栄作氏所蔵なのだろうか

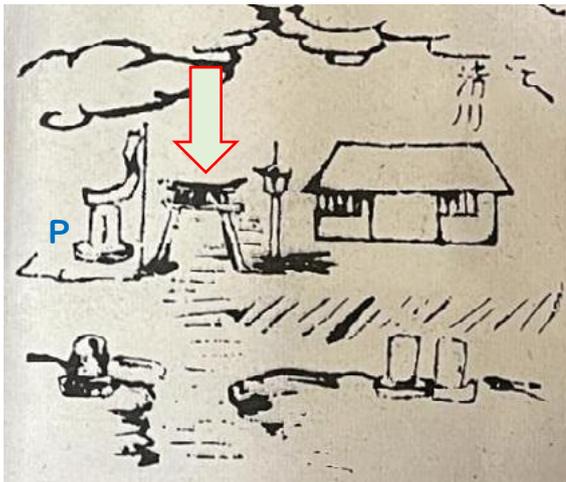


図-13a

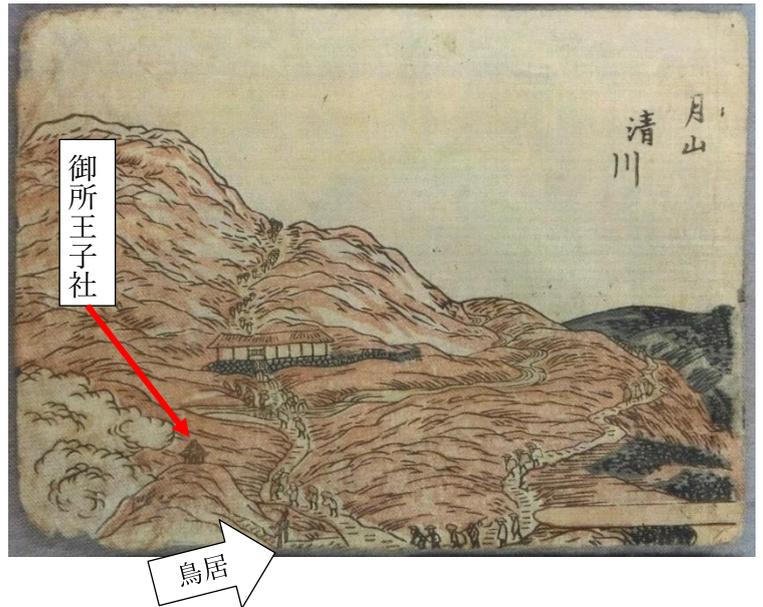


図-13b

(2) 清川行人小屋前の石碑群とこの御所王子神社とからは合わせて、このエリアはまさに鉱山と信仰の融合の時空で歴史を為して来たことの証左である。

「清川 御所王子 社」からの周辺眺望

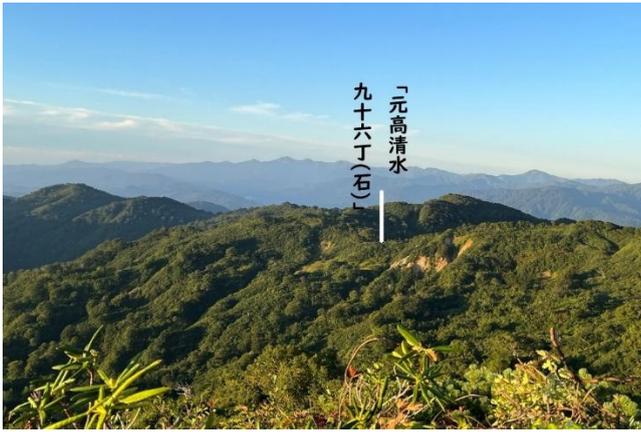
図(表)-14、同社は清川行人小屋から西南に約100m、標高1,380mの小高い丘となっている。月山頂上は見えないが、手盡坂の崖、遠くは東の葉山から奥羽山脈、朝日連峰等が望まれる。



同社から見た清川行人小屋



清川古道から見た小屋と同社



同社から見た高清水通り「高清水小屋」跡地



同社から見た清川古道

図(表) - 14

(end)